

文藝作品：

二人の大学受験生

Two College-Bound Seniors

川 崎 清

1

川浪博は運命の酷薄さを嘆いていた。高校三年生の一学期にイエメンの学校から転校してきた女子生徒と仲良くなりかけた矢先に、その女子生徒が父親の転勤で九月早々また日本を離れることになったのだ。川浪は夏休み前にその生徒から家庭内の複雑な事情を相談され、七月八月と一緒にその解決策を考えることで、二人の距離が縮まったと感じていた。九月以降は、短いけれどもこの濃密な日々が二人の関係を進展させると思っていたのだ。しかし、その期待は打ち碎かれてしまった。二学期が始まり、九月も中旬を過ぎていた。

2

その日六時間目が終わり、川浪は一人で下校した。学校とその最寄り駅との間に小さな公園があり、そこで夏休み中は件の転校生と話すことがあった。しかし、その公園に足は向かなかった。代わりに川浪が向かったのは二本の太いイチョウの木に守られた稲荷神社だった。三畳一間ほどの小さな祠があり、その前に立つと、祠の背後からキジトラの猫がほぼ毎回出てくるのだ。餌をもらえらると思うのか、目が合うと口を開けてニャーとかすれた声で鳴いた。高校三年生になった四月から六月まで川浪は週に二回ほどここにきて、この猫と顔を合わせていた。

この小さな稲荷神社は一方通行の細い道に直角に交わる三十メートルほどの短い参道の奥にある。川浪がその参道の入り口に着くと、今日は先客があった。川浪の通う高校の女子の夏制服を着ていた。白いブラウスと濃紺のボックスプリーツのスカートだ。うしろ姿では誰だかわからないので、会っていいものか迷ったが、結局面倒は避けようと思い、川浪はその場を離れようとした。しかし、人の気配に気づいたのか、その女子生徒はこちらを振り返って、

「あっ、川浪君」

と声を発した。それは同じクラスの高階美奈子だった。

「ここで会うなんて…もしかして川浪君もこの猫に会いにきたの？」

「高階さんだったんだ。誰かと思ったよ。そう、俺、この猫とは高三の四月に会ってね…でも七月から会えなかったんだ。だから久しぶりに会いたくなっちゃってね」

「じゃー、私の方がお付き合いはずっと長いわね、高一の二学期からここにきてるから。川浪

2020年10月26日受理

君は何で今日はこの猫に会いたくなかったの？」

「三時間目に古文の村尾先生の授業があったじゃない。村尾先生が猫は日本文学にすごく貢献してるって言ってたよね。俺、夏目漱石の『吾輩は猫である』のことだと思ったんだ。そしたら、千年も前の『枕草子』や『源氏物語』にも猫が大事件を引き起こすことが書いてあるって言ってたでしょ。それで、なんとなくまたこの猫に会いたくなかったんだ」

「ほんとね、あれには私も驚いたわ。一条天皇が大の猫好きで飼い猫に殿上人^{ぐらい}の位をあげたり、『命婦のおとど』^{みょうぶ}っていう名前までつけちゃうんですもんね」

普段は話したこともない二人だったが、猫を仲立ちとして話が盛り上がり、自然に互いの顔を見てことばを交わしていた。五分ほど話して帰ることになり、最寄り駅まで歩いたが、間^{あいだ}を一人分以上空けて歩いたので、二人にはよそよそしい感じがまだかなりあった。駅に着くと、川浪は上り、高階は下りの電車なので、駅で別れた。その数分後、川浪は車窓の外の流れていく景色をぼんやりと眺めながら、別れたくはなかったという思いに早くも苛^{さいな}まれていた。

3

翌日、川浪が登校して教室に入ると、高階は既にきていて、窓側の列の前から三番目の自席にすわりノートを見ていた。高階は女子にも男子にも自分から話しかけることをしないので、いつも一人で何かものを読んでいる印象の生徒だった。しかし、昨日はそんな無口な高階と話をしてみると、結構波長が合い、川浪には高階の聡明な美しい目や話をしながら笑う時の明るい澄んだ声がとても好ましく感じられたのだ。それで今朝、川浪は思い切って高階に声をかけようとしたのだが、一心にノートに目を注いでいる姿を見ると、邪魔をしない方がいいのかなと迷い、周り^{まわ}の生徒の目も気になって、結局は思いとどまったのだった。

一時間目は石川先生の英語だった。バートランド・ラッセルの『幸福論』の抜粋を読むので、一行に三語は未知語があり、生徒は皆難渋していた。川浪は他の生徒と同様に当てられるのを恐れていたが、無情にも石川先生は「川浪君、この『アナログス トゥ』は以前学習したものと馴染みのある言い回しだと何になるかな」と訊いてきた。川浪は時間をかせぐためにわざとノロノロと立ち上がり、必死で記憶をかき集めた。幸い、答えとおぼしき語句を思いだし、「『シッ、スイ、スイミラー トゥ』です」とどもりながら答えた。

「あ、いいじゃないか、川浪君もやっとやる気になってきたのかな。ま、ともあれ、一つの単語を必ず他の類義のものと関連付けて憶えるようにするといい。そうすると力もついてくる」

そう言いながら、石川先生は銀縁メガネの柄を右手の人差し指と親指でつまんでわずかに動かし、メガネのかけ具合を調節した。生徒の答えに満足した時に見せる仕草であった。

川浪の席は中央の列のうしろから二番目だが、答え終わってその席に腰を下ろす時、窓側にすわる高階の方に目を向けた。すると高階もどういわけか川浪の方を見ていて目が合った。川浪は高階のあの聡明な目の輝きと、唇から今しがたわずかにのぞいた白い歯を見て、高階が自分に向けてかすかに微笑^{ほほえ}んだような気がした。これなら今日タイミングをみて話しかければ応じてもらえるかもしれないと希望が膨らんだ。

六時間目が終わると、川浪はそわそわして下駄箱のところで高階美奈子がくるのを待っていた。しかし、高階の姿が見えたかと思うと、そこへ数人の男女が靴を履き替えにきてしまい、川浪はまたしてもその生徒たちの目が気になって、高階に声をかけそびれてしまった。

己の優柔不断を悔いながら様子を見てみると、高階は女子にも男子にも別れの挨拶をせずに校舎の玄関を出て校門に向かっていった。周りにいる生徒たちも高階にさよならを言わずに、関わりのない者が立ち去るのを見送るような感じで別れていた。高階は素行の悪い生徒ではないので、クラスの者も高階に特に悪い感情は抱いていないが、その代わりに、口をきかない変わり者というレッテルを張り、好きにさせておく方針で高階に接しているように思えた。

川浪もこれまで取り立てて高階に関わろうとしたことはなかったが、猫の話なら大いに盛り上がりとても楽しかったのも、もっと内容のある話ができたら、青春小説みたいなことが始まるのかもしれないと期待したのだ。しかし、今日は不発だった。川浪は高階との思いがけない今回の出会いをこのまま見送ってしまっているのか、帰る道すがら幾度となく自問していた。

4

それから一週間がたった。その日は授業が終わって下校する時、川浪は高階のうしろ姿を追って校門を出た。声をかけるつもりでいたが、すぐには実行に移せずに、跡をつける形で歩くことになった。五分ほど高階の背中を見て歩くうちに、もう後悔したり自問したりの繰り返しはたくさんだという思いが募ってきて、ようやく覚悟が固まり、高階に声をかけた。

「高階さん、あのお稲荷さんに行くの？もし行くんだったら、俺も一緒に行ってい？」

「えっ…いい…けど…だって、だめって禁止する権利は私にはないと思うから。でも川浪君、わざわざ私に近づいて一緒にいるところをクラスの人に見られると変に誤解されない？」

川浪はこのことばを聞いて、声かけが成功したとほっとすると同時に、高階も自分が他の生徒からどう見られているのかちゃんとわかっているのだと思った。また、思いのほか話の滑り出しがうまくいったので、その後はあまり苦勞せずに次のことばを繰り返すことができた。

「高階さんって、自分からは人に声をかけないし、近づかないってことは有名だけど、嫌われてはいないと思うよ。もう高三の二学期だから遠慮なく言うけど、こないだ初めて高階さんと口きいて、俺もびっくりしたんだ。高階さんっていい感じで話せる人だったんだなって」

「ありがとう。あの日お話しができたのは村尾先生のおかげね。『枕草子』の猫の話、とても面白かったし。私だって面白いって思うところはみんなとだいたい同じなのよ。だから他の人とも話はちゃんと合うわ。でも、話したり、話しかけられたりすることが怖くなってしまって…」

「それって、なんかあったってこと？もしかすると聞いちゃいけないのかもしれないけど」

「…ん…ちょっとね。ありふれたことなんだけど…いじめられてたの、小学生の時に…」

高階はいじめと口にしただけで、その具体的内容については明かさなかった。

川浪は高階がどのようないじめにあったのか知れたかったが、無理に聞き出そうとはしなかった。多分とても嫌な目にあい、そのことで負った心の傷が非常に深いのだろうと思ったか

らだ。それに話題が何であれ、話がいつ中断されても相手が高階なら不思議ではないという恐れもその時点では捨て切れなかった。だから次のようにことばを返した。

「いじめかあ、それって経験してる人は多いよね、男子も女子も。俺もいじめられたり、いじめたりで、思い出すといろいろ反省してる。それに、いじめって、しちゃいけないことなんだけど、いじめられたりすることで人の心の痛みがわかるようになったりするじゃない。だから、いい面っていうか必要悪っていうか、全部だめって言いきれない面もあるんじゃないかな」

「そういうことが言えるのは、川浪君がしたり、されたりしたいじめはまだ質^{たち}がいいいじめなのよ。多分、子供の成長には必要で避けて通れない程度の仲間同士のじゃれあいなの。誰とどれだけ距離をとったらいいのか、どういうときに一緒に笑ったらいいのか、そういう空気が読めるか読めないかで仲間から外したり、からかったりしてたんじゃない？私の受けたいじめはそういうのじゃなかった。だって、大人も一緒になって私を変な目で見たいじめたんだもん」

高階はそう言うと、顔から表情がなくなって、川浪と歩調を合わせることもなく、ただまっすぐに歩いていった。川浪はことばをどう続ければよいのかわからずに、無言のまま高階に遅れないように、しかし先にも行かないように歩くしかなかった。狼狽の色を隠せずにあたふたとしていたうちに稲荷神社の参道に着いてしまった。

5

参道では高階と並んで歩こうと思い、川浪は高階の歩幅に合わせた。しかし、二人の間は離れていて、親しめない冷たい雰囲気があった。それでも何とか祠の石段の前まで来た。気詰りなのはわずかな時間だったが、川浪にはとても長く感じられた。何か言わなければならないと川浪が苦心していると、ニャーとかすれた声で鳴きながら、いつもの猫が石段の右背後から顔を出した。高階は猫を見ると、膝裏に手を当ててスカートをきちんと折り込んでしゃがみ、すり寄ってきた猫を迎えて、毛並みに沿って頭や首周りを丁寧に撫でてやった。川浪も撫でてやりたかったが、高階の横にしゃがみ込めずに、うしろに立って見ているしかなかった。

高階は猫を見たままで顔を上げずに、立ったままの川浪に声をかけた。

「川浪君も撫でていいわよ」

川浪は「撫でていいわよ」などと許可を与えるような言い方をされて、かなり気を悪くした。しかし、いじめという話題から離れられそうなので我慢して、高階の横に腰をおろした。

「猫、ずいぶんよく懐^{なつ}いてるね。でも俺にだって懐いてるんだ。いつも出てきて、頭をぐいぐいと俺の足にすりつけるからね。ところで、高階さんは猫に何か餌はあげてるの？」

「本当は餌をあげちゃいけないんでしょうけど、家から魚肉ソーセージをもってきてるの。ここは近所の方がこの猫をとてかわいがってるから、餌のことは心配しなくていいんだと思うけど、せっかくこうして出てきてくれるから、お礼のつもりでソーセージをあげてるわ」

川浪は片口イワシの煮干しを二三本紙に包み鞆に入れて家からもってきているが、猫はそれを食べないこともあった。高階の話から推測すると、猫はソーセージを食べていて、それが好きらしく、選り好みをしているようだった。猫なりの現金な態度がわかり、川浪は腹が立つよ

り、かえって面白かった。また、猫の頭や背中を撫でていると、自然と心が和み、高階のすぐ隣にいても、女子と話す時に感じる緊張とか気後れがいつもより少ないことに気がついた。

「川浪君、『懐く』って、英語でどう言ったらいいのかしら？」と不意に高階が訊いてきた。

川浪は面食らったが、ここでいいところを見せれば高階の歡心を買えると思い、授業で当てられた時以上に頭をフル回転させると、どうにか答えを思いついた。

「うーん、多分『フレンドリー』かな、それしか思いつかないけど、合ってるかなー」

「そう、『フレンドリー』でいいのね。じゃー、『ユーアーフレンドリー』」

高階は猫に英語で話しかけると、川浪にもにっこりと微笑^{ほほえ}んだ。いじめの話になってから目を合わせようとしなかった高階がまた自分に笑顔を向けてくれたので、心にしつこく残っていた拒絶されるかもしれないという不安がすっとほぐれていくのを川浪は感じた。

高階は猫が餌を食べ終わったのを見て、猫を抱きあげようと両腕を伸ばしたが、猫は高階の腕の中に抱かれようとする寸前で身をひるがえし、腕の輪の外へ逃げてしまった。

「やっぱり今日もだめだったわ。毎回抱っこしようとして腕の中に入るところまではいくんだけど、最後のところで逃げちゃうの。もう二年以上のお付き合いなのに私を本当には信頼してないんだわ。野良ちゃんだから、野生が残ってて人間を警戒しちゃうのかしら」

「俺も高階さんと同じことするけど、いつも腕の外へ出ちゃうね。この猫も誰かにいじめられて、それを憶えてて、最後のところで人間を信用できなくて逃げちゃうのかもしれないね」

川浪は話がいじめに戻ってしまったことに気がついて、しまったと後悔した。帰路、二人は話も弾まずに駅に着き、さよならも言い交わさずに別れた。川浪は悄然^{しょうぜん}として高階の背中を見送った。

6

それから四日がたった。しかし、その間高階は教室で会っても、川浪におはようのあいさつはおろか、目を合わせようとしなかった。他の生徒はそれが高階の普段の振る舞いだと心得ているので、いつもと違ったことが起きているとは思わなかった。川浪だけが高階と口をきける関係を失いそうだと焦っていた。実は川浪は昨日も稲荷神社に行ってみたのだ。しかし、高階の姿はなかった。先にきて猫と会い、帰ってしまったのか、それともこれからくるのかわからないので、川浪は神社でしばらく待つことにした。だが、四十分たっても高階はこなかった。気持が鬱々と深く沈み込んでいくのが川浪には自覚できた。

その日も今日ならきっと会えるという根拠のない期待をして、川浪は稲荷神社に足を運んだのだった。着くと猫がいつものようにかすれた声で鳴いて迎えてくれた。川浪はその日は煮干しではなく魚肉ソーセージを持ってきていて、それを猫に与えた。しゃがみ込んで五分ほど猫と戯^{たわむ}れていたが、高階はもうこないだろうと思って立ち上がった時、参道の入り口に高階が姿を現した。

「あっ、きたんだ」と思わず川浪は声を出し、高階に手を高々と振っていた。心がぱっと明るく晴れやかになり、鬱々とした焦燥感がすっと消えていくのが自分でもはっきりとわかった。

高階は手を振った川浪には応えずに黙って石段の前まで歩いてくると、猫が自分の足に頭をすりつける様子を見ながら、しばらく立っていた。それからしゃがんで猫の頭を撫でてやった。

「川浪君、餌をあげたのよね。でも煮干しじゃないみたいね」

「うん、俺も今日から魚肉ソーセージにしたんだ。猫も煮干しより好きそうだし」

「あー、でも、川浪君は今まで通り煮干しをあげてくれない。私は鞆かぼんに煮干しの臭いがつくのが嫌でソーセージにしてるの。本当は煮干しのような固いものをしっかり噛んで食べるのが猫の健康にもいいんだと思う」

猫をなでると気が鎮まるのか、高階の声は穏やかだった。また、その口ぶりから判断すると、いじめについての川浪の理解不足も許してくれたようで、川浪はほっと胸をなでおろした。

「うん、わかった、いいよ。じゃ、ここには高階さんと一緒にきて、煮干しは俺があげて、ソーセージは高階さんがあげるってことにしようよ。俺が先にきてもここで待ってるから」

とっさに言った提案だったが、高階と一緒にここにくる、あるいはここで一緒にいることがしっかりと条件に入っていて、川浪は我ながらいい提案だと思った。

「わかったわ、じゃそうする。でも川浪君と一緒にいるのは、あくまでも偶然そうなるってことでいいんじゃない。その方がお互い束縛しないでいいと思うの」

「うん、それでいいよ。じゃーこれまで通り、俺は煮干しをもって来るよ」

川浪は高階がこの稲荷神社で一緒にいることを、偶然であれ何であれ、結果として了承したことに大いに満足した。このやり取りがあった後で、高階は何かを思い定めたのか、穏やかだが真剣な面持ちになって、川浪の目をまっすぐに見て語りだした。

「川浪君、この間、私が猫を抱こうとすると逃げちゃうところを見てて、それは猫が前に誰かにいじめられて、それを憶えているから、最後のところで人を信用してないんじゃないかって言ってたじゃない。私、あれ聞いてて、自分のことを言われている気がしたの。」

川浪は話題がいじめになったことで、高階がいじめについての川浪の認識不足を思い出し、また心を閉ざしてしまうのかと心配になった。でも今回は高階自身が話題を選んでいるから、高階が何か伝えたいことがあるのだと思い、次に何を言うのか待つことにした。

「小学校に上がる前に、親が離婚して私は父と暮らすことになったの。五歳のときよ。母が急にいなくなって、毎日朝起きると母を探していないと言って泣き、お昼にまた母の姿を家中探していないと言っては泣いたわ。夕方までずっと泣いてたの。そんな生活がずっと続いていて、さすがに私ももう母は帰ってこないんだってわかった。父はおろおろしながら私の気が紛れるようにいろいろしてくれた。食事やおやつはおいしいものを買ってくれて不自由はしなかった。でも、それって、寂しさや悲しさを本当には癒してくれないじゃない。でも、父が一生懸命に私の気持ちをいたわってくれているのは何となくわかってたの。だから私も父を困らせたくないって思った。今思うと、自分でもけなげでいじらしいと思うわ、だって五歳なんだもん」

高階は一気に生い立ちの上での大事件を川浪に語った。家庭の内情を打ち明けてくれたのは、自分が信用されているからだと思い、川浪はとても誇らしい気持ちになった。しかし同時

にその信頼に依って、高階を励ますことが自分にできるのか川浪ははなはだ心もとなかった。

7

川浪と高階は学校では口をきかなかった。それまでことばを交わすことがなかったので、急に話をするのもおかしく思われるだろうと人目を気にしたからだ。川浪にしてみれば、自分は何を言われてもかまわないが、高階が変な目でクラスの男女に見られるのが嫌だった。だからその日も六時間目が終わると、帰りの支度をしながら川浪は高階の方を見た。高階も教科書を鞆に入れながら、川浪を見て、黙って小さくうなづいた。これが稲荷神社で会うことを確認する二人の合図だった。川浪はその取り決めを非常に苦勞して高階から取り付けたのだった。

神社に川浪が先に着くと、猫はのそりのそりと出てきて川浪の足首に頭をすりつけ、それから石畳にごろっと仰向けに寝転がり、腹を見せて歓迎の意を表した。しゃがんで腹を撫でてやっていると、気がつかないうちに高階がきていて、うしろに立って川浪と猫の様子を見ていた。

「あっ、足音が聞こえなかった。今着いたんだよね。この猫はこうやっていつも俺と遊んでくれるんだ。俺も猫になっちゃうね、こんなふうに相手をしてもらえると」

高階も顔をほころばせながら、しゃがみ込み、猫の腹を手で丁寧にゆっくりと撫でた。

「私、川浪君とお話できるのは、猫が安心しきって川浪君に甘えているのを見たからなの。猫が信用する人なら大丈夫って思ったのね。でも、私のこと、川浪君は今でも変に思ってるでしょ、誰とも口をきかない変人奇人だって」

川浪は先だって高階が父子家庭で育ったことを知った。そういう事情なら当然ながら苦勞も多かったろうと推測した。女子が女親から教えられることはとても多く、それを知らずに女子や男子の中でうまく立ち回るのは非常に難しく、辛い面がたくさんあったろうと思ったのだ。その困難と辛さのために高階は人との交際を避けるようになってしまったのだと推量した。

「うん、変人だと思ってた。でも今はぜんぜん普通の人だと思ってる」

「『普通の人』かあ。でも、『普通の人』って、どういう人のこと。『普通』って何なの？」

川浪の返事を聞くと、高階は急に口調がきつくなって問い詰めるような物言いになった。顔から表情も消えていた。川浪は何か気を悪くさせることを言ったのかと自分の発言を振り返ったが、何が悪いのか思い当たらず困惑していた。すると高階が続けて言った。

「私が苦しんできたのはその『普通の』とか『変な』っていう区別なの。区別ならいいんだけど、『普通の』っていうことばが使われる時は、その『普通の』からはずれる人は、差別されてるのよ。だって、言う方の方は自分の経験から理解できないっていうだけで、言われる方の人をすぐに汚らわしいとかいやらしいとか危険だとか感じてしまい、その人を冷たい視線で見ちゃうから。それって、自分では意識してなくても、その『普通』でない人を差別してるってことなのよ」

川浪には差別をしている気持はまったくなかったが、高階を「普通の人」と呼んだ時、「普通」とはどういうことなのかちゃんと考えていなかったことに気がついた。

「そうかあ、『普通』って難しいことばなんだね。俺、ただ最大公約数みたいな意味って思っ

てた。高階さんは人と口をきかない変な人だと思ってたけど、話してみたら、ちゃんと盛り上がる場所は盛り上がってくれるから、みんなと同じだと思ったんだ。それで『普通の人』って言ったんだよ」

「『みんなと同じ』ってところが大事なのね。同じでないと『変な人』になって、警戒されたり、嫌われたりするんだわ。みんなと同じじゃないけど、別にみんなに迷惑かけるわけじゃない形で、みんなとは違う人だっているのよ。そういう人はみんなと同じにしないと差別されてひどい目にあうから、目立たないようにひっそりと暮らしているの。それが私なの」

「でも、今は親の離婚で一人親の家庭は珍しくないよ。父子家庭だって母子家庭よりは少ないだろうけど、だからって、人と口をきかないでひっそり暮らす必要もないんじゃない」

高階は川浪のことばを聞いて、しばらくの間黙っていた。ことばを探して言いよんでいるようであったが、意を決したのか、川浪の顔を正面から見て口を切った。

「私のうちは一人親家庭じゃないの。父が二人いる家なの」

8

川浪は言われたことばの意味がわからなかった。返事をしようとしたけれども、何を言うべきか見当がつかなかった。高階はやっぱり説明しなくてはわかってもらえないと思ったらしく、言い直してきた。

「父と母が別れたのは、父が女性には関心がない人だったからなの。父も何となく十代になってからその自覚はあったようだけど、何とかなると思ってたそうなのね。でも、母と結婚した後になって、はっきりと自分のことがわかったんですって。で、このままじゃ父も母も不幸になるだけと思って、話し合っただけで離婚することに決めたの。離婚するには親権者を誰にするか決めるんだけど、母はまだ三十一歳だった。私がいなければ十分に人生をやり直せる年齢だったのね。だから、父も自分のせいで母の人生をこれ以上壊したくないと思って、娘の私を自分が引き取ることにしたんですって」

川浪はその話を聞いて、高階は幼くして川浪の理解をはるかに超える出来事を経験し、それを生き抜いているのだと思った。高階に畏敬の念を抱くと同時に、大人の事情に翻弄されてきた高階のこれまでの^{いきさつ}経緯をととても痛ましいものと感じたのであった。

「うーん、なんて言っているのか、高階さんって…」

「『不幸』って言いたい、それとも『かわいそう』って?」

「正直言って、そのことばも思い浮かんだ。でも、一番最初に思ったことばは『えらい、すごくえらい』っていうことばだよ。俺なら、同じ境遇なら、多分、今の高階さんのようにきちんと生きていないかもしれないって、そんなこととっさに思ったんだ」

このことばを聞いて、高階は心の底にしまっておいたことを打ち明け、それを川浪がしっかりと受け止めてくれたことがわかり、とても嬉しかった。この重い話をした後、二人は猫に代わるがわるもってきた餌を与え、頭と背中を撫でてやり、神社を後にした。二人とも駅に着くまで何も話さなかった。川浪は疾うに高階に魅かれていたが、高階の方も川浪とことばを交わ

すうちに、心に占める川浪の割合が徐々に大きくなっていった。二人は互いに惹かれつつあることを自覚しながら、当の相手とまさに今一緒に歩いている奇跡を思い、胸が一杯になっていたのであった。

川浪は高階と駅で別れてから、父親が二人いる家庭について考えていた。二人の男親はどちらかが母親の役割を担うのだろうか、それともただ男親の役割だけを二人の男が代わるがわる果たしているのだろうか、いろいろ想像したが明確なイメージはもてなかった。高階が女子なので男親には相談できないことも数多くあり、様々なことで不便で辛い思いをしているのではないかと、その境遇に思いを巡らせて、何か力になれることはないかと考え込むのであった。

9

その翌朝、川浪が登校すると大事件が待っていた。教室に入ると、生徒たちの雰囲気さがっと変わるのがわかった。みんなが川浪を見つめていたのだ。見回すと教室のうしろのホワイトボードに川浪と高階の名前が書かれ、マーカーペンでリアルな絵も描かれていた。川浪は穿いたミニスカートが腿の半ばまでずり落ち、高階も穿いたズボンがやはり膝までずり落ちていて、そんな二人が立ったまま抱き合っている淫らな絵であった。それはグスタフ・クリムトの絵画「接吻」の構図をまねたものようだった。高階は既に教室にいて、何事も起きてないかのように、いつも通り自分の席でノートを見ていた。二十人ほどいる他の生徒たちは、川浪が登校したらどういう騒ぎになるのか固唾を呑んで待っていたようだった。

川浪は高階を見た。高階は黙ってひたすらノートを見ていた。その姿を見て、川浪はすべてを察し、痛ましい思いで胸がふさがれた。同時に、こんな卑猥な絵を描いた人間に対する憤りがどっと胸に込み上げてきて、川浪は自分を見ている生徒たちにことばをたたきつけていた。「なんなんだよ、これ。意味わかんねーよ。なんで俺がスカート穿いてんだよ。なんで高階さんが描かれてんだよ。誰だよ、こんなくだらな絵を描いたのは」

しかし、込み上げた感情があまりにも重く胸を圧迫したので、川浪の声は絞り出すようなかすれた声になってしまった。

その時、川浪のことばを引き取ったのは永井京子だった。クラスで一番小柄だが、物怖じしないで何でもずばずば率直にものを言う生徒だった。

「私、知ってるわ。これ描いた人。だって見ちゃったから。こんな嫌がらせをする人、今すぐ誰だかばらして、とっちめてやりたいけど、一度だけチャンスをあげるわ。名乗り出て、高階さんと川浪君にちゃんと謝ったら私は許してあげる。二人が許すかどうかはわからないけど」

永井がこう言うと、生徒たちはみな自分の周りの生徒を互いに疑いの目で見合うのだった。更に永井が言い足した。

「この中にいるわ。きっと川浪君と高階さんが慌てて困る姿をこっそり見てて、楽しもうって魂胆なんですよ。で、ウズウズしながら待ってたんですよ。でも、残念でした。もうだめね、私に見られてるから。さあー、ぐずぐずしてないでさっさと名乗り出なさい」

証拠をにぎる者の語気に押されて観念したのか、一人の女子生徒がよろよろと立ち上がった。

「私が描いた、ごめん。だって、たっ、高階…高階が羨ましかった。愛想も何もないくせに、男だけはちゃんとうまく引っかけて、にっ、にっ、憎たらしかった」

名乗り出たのは宮守和子だった。宮守はがり勉タイプで、本人は一生懸命勉強している様子なのだが、その成果には見るべきものは何もなく、気の毒になるほど低空飛行であった。それなのに本人は気位が滅法高く、いつも上から目線で物を言うので誰からも疎まれていた。

宮守の下品な自白を聞いて、永井が裁判官のように厳かに、そして諭すように言った。「宮守さん、名乗り出てくれてありがとう。この学校も落ちるところまで落ちたと思ったけど、最後のところで踏みとどまったわ。でも、『ごめん』じゃだめでしょ『ごめん』じゃ。もっとちゃんと二人に謝らなくちゃ。さあ、**ちゃんと謝りなさい**」

宮守和子は永井の怒気を含んだ声に委縮して、まずは高階の方を向き、声を震わせて言った。「たっ、高…階…さん、へ、へんなこと書いて、ご、ご、ごめんなさい。許してください」

それから川浪に向かって鼻孔から流れ出した涙をすすりながら、涙声で言った。「川浪君、ご、ごめん。あっ、ち、ちがう、ごめんなさい。ゆ、ゆ、ゆるしてっ」

そう言うと宮守は羞恥と屈辱で顔をゆがめ、口にハンカチを当てて教室を走り出て行った。

10

事件の日の六時間目が終わり、川浪が帰り支度をしていると、高階の席に行った永井京子が川浪にもくるように手招きした。川浪が高階の席に行くと、永井は二人に向かって言った。「高階さんと川浪君がよければなんだけど、今日少しお話ししない。あんな事件があった日だから早く帰りたいのかなっとは思っけど」

高階と川浪は顔を見合わせたが、川浪が返事は任せるという意味で高階にうなづいた。「もちろんいいわよ。なんか今朝は永井さんに助けてもらって、私もお礼を言いたって思ってたの。じゃー、三人で下校して、どこかいいところがあったら、そこでお話しましょうよ。川浪君も時間は大丈夫でしょ？」

「もちろん大丈夫。早く帰ったって、勉強なんかどうせしないしね」

と川浪はうきうきした様子で高階の問いかけに応じた。

三人は連れ立っていつもの道を歩いて駅向うに出ると、大通りをそれた路地裏にひっそりとたたずむ小さな和風喫茶店に入った。四人掛けのテーブルが二つあり、奥のテーブルに三人は腰を下ろした。川浪はテーブルをはさんで女子二人と向かい合ってすわり、緑茶をもって出てきた老女に極めて礼儀正しく「抹茶白玉クリームあんみつを三つお願いします」と注文した。

あんみつが出てくると、三人はすぐに黒蜜をかけ、匙ですくって一口食べた。熱い緑茶の苦みに黒蜜の甘さが絶妙に合い、味覚が刺激されて、三人とも放課後の開放感で心が一杯になった。話には花も咲いて、話題は今朝の事件の核心に移った。永井が最初に口を切った。

「実は、私、ほんとのこと言うと、あれ描いたところ見てないんだ。でも、絶対、描いた人はこの中にいるって思ったの。その人は高階さんと川浪君が恥ずかしがったり、慌てたりするところが見たくて、あそこにいるって思ったのよ。それでカマかけたら、見事に引っかかっ

ちゃったわ。でも、まさか女子が描いたとは私も思ってなかった」

すると高階がクスッと笑いながら永井に応えた。

「そうだったのー。永井さんが『見た』って言うと、もうそれが真実としか思えなくなっちゃうわね。でもね、実は私、あれ描いたの誰だかわかってたんだ。宮守さんは私と小学校、中学校が同じなの。それで私の家の事情も知ってるのね。でも、好きになる性が男か女かという性的指向や心の性は男女どっちかという性自認のことはやっぱりぜんぜん理解してないって今日わかったわ。永井さん、驚くかもしれないけど、私の家って、父が同性婚してて、父親が二人いる家庭なの。宮守さんはそのことを知ってて、それをわざわざ匂わしたり、私が川浪君とお話しするようになったことを、なんかいやらしいことをしてるように見せて辱^{はずか}しめるために、あんな変な絵を描いたんだと思う。小学校のときも先頭に立って、変な家の子、いやらしい家の子、変態、変態って言って、さんざん私をいじめていたの。それで私、人と話すことが怖くなって、口をきかない子になっちゃった」

川浪は二人の会話を聞いて、今朝本気で憤ったり悲しんだりした自分が滑稽に思えてきた。「なんだ、そうだったの。俺、描いた奴、男と思ってたから、殴り合いを覚悟したんだ。でも、犯人が女子だったとはね。宮守って、やることが陰湿だね。嫌だな、ああいう妬み深い女は」

すると永井京子が高階の方を向いて真剣な顔つきになり、ことばを選びながら静かに言った。「高階さん、言わなくて済むことを言わせてしまつてごめんなさい。でも、そのことは私の耳にも入ってたわ。宮守さんがそう言ってたって、新井さんから聞いたの。そうやって人のプライベートに触れ回り、その人を変な目で見るとしむける人なのね。かわいそうな人」

三人は今朝の件は深刻な事柄も含むだけにそれ以上の話はせずに、他の話題に話を移した。

11

十月中旬にある二学期の中間試験も終わり、来年一月半ばに実施される大学入学共通テストも迫ってきた。川浪も高階も願書は十月初旬に在学高校の進路部を通して大学入試センターに郵送してあった。また、二人はあの事件以来教室でもことばを交わすようになっていたが、川浪も高階も互いの第一志望校の名前を言い合ったことはなかったの、高階が川浪に尋ねた。

「川浪君は第一志望の大学はどこにするの？」

「俺、校歌がいい大学に行きたいんだ。だって、俺たちの高校の校歌って、山田耕筰作曲で歌いやすくっていい曲だよ。歌詞もいいし。『^{たゆ}撓まず学び、いそしみて、知慧さとき者とはならん』なんてところ大声で歌うと気持ちスカッとすよ。だから、大学も校歌で決めるんだ」

「それ本気で言ってるの。じゃどこがいいの？」

「好みもあるから意見は一致しないと思うけど、俺の意見じゃ一番いいのは早稲田と明治、二番目が東京経済大と法政、三番目が立教と日大それに慶応だね。ただし東京経済大学は今の校歌じゃなくて前身の大倉高等商業の校歌がいい。ちゃんと調べたんだ、俺なりに」

「それって、とても面白い視点ね。偏差値なんかじゃなくてユニークでいいと思う。でも勉強しに行くところを選ぶのにその基準で大丈夫なの？」

「俺の前にもいたんだよ、校歌で進学先を決めた人が。阿久悠って作詞家いたでしょ。あの人は明治の校歌を聞いて、明治に進学を決めたんだ。本当だよ、エッセイに書いてあった。あんなクリエイティブな人が選んだ基準だから、大丈夫だと思う。高階さんはどこを志望してるの」「うーん、法律を勉強したいのと、学費も考慮して東京都立大学に決めたく。合格は四分六でだめかもしれないけど」

「法律を勉強するって、将来弁護士とかを目指すの？」

「そうできたらいいなって思ってる。例えば、うちみたいな家庭だと、日本では同性婚が法律で認められてないから、当事者の人が困る場面がたくさんあるのね。父が病気になった場合、父のパートナーは家族じゃないっていう理由で医療機関から情報をもらえないこともあるの。だから、何がどうなってるかわからないし、手術の同意書にサインもできない。保険契約をする場合には保険金の受取人にもなれないのよ。今は娘の私がいるから、こういうのは一応済んでしまうんだけど。父のような性的少数者や何か別の理由で差別を受けてる人たちを救済するために、法律を勉強して法制度を整えたいって思ってる。だから都立大の法学部に進学したい」

川浪は高階のしっかりとした進学理由を聞いていて、自分が将来を見据えた上で進学を決めているわけではないことを少し恥ずかしく思った。でも、そうは思ったものの「校歌で大学を決める」というのも川浪にしてみればまんざら嘘ではないのだった。

12

年も押し詰まり明日から期末試験という日のことだった。三時間目の古文の授業中、教室の前側の戸口に事務室の人がきてノックと同時に慌ただしく戸を開けた。担当の村尾先生に一礼し、廊下側にきてもらって何か耳打ちをすると、村尾先生はハッと驚きの表情を浮かべて、高階を手招きで呼び寄せた。二人の下^{もと}へ行行った高階は事務の人から言づてを聞くと顔が蒼白になった。すぐに自分の席に戻り、手早く私物をまとめると、今にも泣きだしそうな顔を見られないように上体をかがめて、急いで教室を出て行った。それを見送った村尾先生は沈痛な面持ちで、高階の父親が交通事故に巻き込まれたことを生徒たちに告げた。

授業が終わるとすぐに、川浪と永井京子は村尾先生を廊下で呼び止めて、事情を尋ねた。

村尾先生は眉をひそめて暗い表情になり、低い沈んだ声で説明した。

「高階の父親は池袋サンシャインビル前の大通りを歩いていて、突然歩道に飛び込んできた車に轢かれたそうだ。かなり重傷らしい。救急車で運ばれて今頃は多分手術の最中だろう」

「先生、高階のお父さんが救急搬送された病院の名前と所在地を教えてください。俺、あとの授業は欠席して病院に行ってきたんです」

川浪は村尾先生に早口でまくしたてて、返事を急^せかした。村尾先生は何とか落ち着かせようと、川浪の二の腕を軽くたたいてなだめながら言った。

「こういう時は家族に任せたい方がいい。他人がいても気をつかわせるだけだから」

「先生、高階は父子家庭で家族は高階しかいないんです。だから、なんか人手が必要なら、俺、手伝ってやりたいんです」

そう言うと、川浪は村尾先生がもっていた連絡メモをスマホで写真に撮り、廊下を全速力で駆けだして、校舎の玄関口に向かって行った。横で聞いていた永井もすぐさま「川浪君、私も病院に行くわ」と言って、川浪の跡を追った。二人とも私物は教室に置いたままだった。

「永井さん、ありがとう。一緒に行こう。高階さん、きっとすごく心細い思いをしてるよ」

川浪も永井も高階の力になりたい一心で通学路を走って駅へと急いだ。

13

二人は病院に着くと、受付で来意を告げた。高階の父親は救急搬送された後、緊急手術を受けて、今は容体を見ているところという。ICUと表示された集中治療室の前の待合室に行くと、高階が下を向いてぼつんと一人で長椅子にすわっていた。

「高階さん、何か必要なものあったら言って、あたしたちがそろえるから」

永井はどうことばをかけていいかわからないながら、何とか高階に声をかけた。

「あっ、きてくれたの。ありがとう。今、五十嵐さん、えっと、父のパートナーなの、五十嵐さんに連絡したから、もうすぐここにくるわ。父はすごいスピードを出してた車に轢かれて…」

高階は長椅子から立ち上がってそう返事をする、あとを言えなくなり、両目からぼたぼたと大粒の涙をこぼした。永井はすぐに高階に近寄って背中にそっと手を当てて抱えるように支えてあげたが、川浪は何もできずに立ち尽くしていた。そこへ四十代後半の男性が慌ただしく入ってきて、高階を見ると、すぐに声をかけた。

「美奈子ちゃん、お父さんの手術、どうなんだ。うまくいったのか？」

「わからない。なんとも言えないってお医者さんに言われて、もう二時間近くも待ってるの。いま、高校の同級生の人たちもきてくれて、あの、こっ、こちらが父の…五十嵐康之さん…」

高階はこの緊迫した状況の中で、居合わせた者たちの間をけなげにも取り持った。

その時、ICUのドアが開き、青い手術着を着たまの医師が出てきて、高階を呼び寄せた。

「お嬢さんだね、手はすべて尽くしたんだが…ご臨終です。中に入って最期を見てください」

高階は唇を真一文字に引き結んで泣くのをこらえながら、五十嵐さんを見て、一緒に中に入るよう促した。すると医師がICUの戸口の前に立ちはだかって、はっきりと言った。

「こちらの方はご親族ですか？当病院では臨終に立ち会えるのは三親等以内のご家族だけです。それ以外の人は遠慮してください」

医師は高階が病院到着時に書いた書類を見て、父親が単身者であることを知っていたのだ。

川浪と永井は当然だが、結局、五十嵐さんも臨終に立ち会うことはできなかった。二十分後、高階は涙で頬を濡らしてICUを出てくると、五十嵐さんを見るなり駆け寄って抱きつき、声をあげて泣きじゃくった。川浪も永井も立ち尽くして、ただ見ているしかなかった。

14

翌日から三日間続く期末試験を高階はすべて忌引で休んだ。クラスの生徒代表と担任教師が葬儀に出席する手はずでいたが、亡くなった日の深夜に、葬儀は近親者のみで執り行うので、香典、献花、焼香の類は一切辞退する旨、高階家から学校にFAXで連絡が入っていた。それ

で生徒も担任も何もすることもなく日が過ぎてしまった。

人が死亡すると一般的には通夜、葬儀、告別式、火葬と行事が立て続けにあるのだが、高階の場合は病院から出た死亡診断書をもって区役所に行き、火葬許可書の交付を受けて、葬祭業者に連絡を入れ、できるだけ簡素に葬儀を済ませたのだろうと川浪は推測した。しかし、五十嵐さんと手分けをして対処したとは言え、その簡素な葬儀手続きを済ませるだけでも、高階には心身ともに疲れ果てる務めだったろうと川浪は高階の身を深く案じたのであった。

15

十二月十七日に高階は期末試験に代わる課題レポートを提出するために登校した。各教科の担当教員にレポートを渡し終えて高階が職員室から出てくると、川浪は声をかけた。

「高階さん、大変だったね。俺、何の力にもなれなくて、ごめん」

「川浪君、ありがとう。あの日永井さんと一緒に病院にきてくれて、ほんとに心強かったわ」

こうやり取りをしたものの、高階の表情は暗く憔悴^{はため}きっているのが傍目にもわかった。川浪は高階の気持ちを何とか励ましたかったが、肉親を亡くしたばかりの高階にかけるべき次のことばがわからなかった。最初に思いついたことが口に出た。

「高階さん、こんな時に変かもしれないけど、あの猫に会いに行ってみない？ずっと会えてないよね。俺、これまで何か辛いことがあった時は、猫のところに行ったんだ。するとなぜだかわからないけど落ち着いて、できることからしなくちゃいけないって気持ちになれたんだよ」

「いま川浪君が言ったこと、私にも当てはまるわ。私も辛いこととか悲しいことがあると、猫と会ってたの。猫ってかわいいだけじゃなくて、不思議な力をもってるみたい。じゃ、これからあの野良ちゃんと一緒に会いに行きましょうよ。幸いソーセージももってきてるから」

16

期末試験の後は毎日午前中授業なので、二人は校門を出てからパン屋に寄り、昼食用のサンドイッチを買って、稲荷神社に向かった。しかし、着いてみると、いつもはすぐに祠の背後から出てくるはずの猫は姿を現さなかった。せっかく会いにきたのに残念と思いながら、二人は祠の前の石段に腰を下ろし、サンドを食べながら話を始めた。

「あーあつ、私、天涯孤独の身になっちゃった。今は五十嵐さんと一緒にいるけど、来年になったら、五十嵐さん、出て行くって言ってるの。父と五十嵐さんの同性婚の暮らしは丸十年だったわね。私が七歳のときからだから。私にとってはもう五十嵐さんも家族だわ、父といってもいい人よ」

川浪は高階の親族関係の実際を知らなかったので、訊いていいのか迷ったが、質問した。

「でも、両親の実家に祖父母がいるんじゃない？兄弟とかも？」

「父の両親はもう亡くなっての。それに父は一人っ子。二人いる親類は同性婚のことで交際してくれないから、絶縁状態なのね。それもあってでしょうけど、父に万一のことがあったら、私に渡すように五十嵐さんが父から頼まれていたものがあったの。それって、私の母の実家の住所と電話番号が書いてある紙なのよ。父と母が別れてから、母の両親は母のことは父には一

切教えてくれなかったんですって。もう娘の人生には関わるなって意味でしょうけど」

「でも、高階さんはその祖父母にとっては孫だよね。どんな事情があっても、自分たちの娘が産んだ子供なんだから。やっぱり、いろんな時に心配してるんじゃない、どうしてるかなって」

川浪は言うてから、ありきたりのことばしか返せない自分に苛立っていた。すると、高階がうんざりした様子も見せずに、きちんと応えてくれた。

「私はあの人たちの娘の過去にも未来にもいてはいけない子ってみたいだった。祖父母にとっては私の父は娘をだました悪い男、私はその悪い男が娘を汚した証^{けが}以外の何物でもないってわけ、だから……」

高階は食べかけのサンドを手にもって、次のことばを飲み込んだ。しかし、川浪には高階が口にしようとしたことばが聞こえるような気がした。

「五十嵐さんが母の実家に連絡するように言ったので、私、電話してから会いに行ったの。私はもう会うつもりはなかったんだけど、法律で決められてる身上監護者というのに母方の祖父母がなってるって理由からね。祖父母の家は当然小さい時に行ったことがあるはずなんだけど、もう憶えてなくて初めての場所に思えた。でも、行って後悔してる。だって、会うなり、母は再婚し、今ではその夫との間に娘が二人もいるから、私^{あかし}が会いに行って娘、それって私の母のことよ、娘とその家庭をまた混乱させるようなことはしないでくれって私に言うんだもん。父がきちんと私を育てたから、祖父母は私の監護者の役目なんかしたことがないし、もう高階家のことは忘れてみたい。きつと思ひ出したくない親子だったのね、私たちのことは」

川浪は高階がさっき言わずに飲み込んだことばが「自分は両親の愛の証^{あかし}でもなく、祖父母にも望まれず、そして必要とされずにこの世に生まれてきた」ということばだと確信した。母親や祖父母の愛情を信じられない高階の悲しい内心の叫びを耳にした気がしたのだ。川浪は高階のその悲しみを徹底的に拭い去り、高階がもつ高階自身の真価に気づかせてあげたかった。

「でも、俺、とてもすごいって思うよ、高階さんは。だって、変な嫌がらせにあっても屈しない我慢強さがあるし、勉強も一生懸命してる。それに自分と同じように何かで差別されてる人たちに理解があって、その人たちの力になろうって、弁護士になる目標も立てちゃうんだから、ほんとにえらい。だから、お父さんも身近にいて、高階さんが自立心をもってたくましく成長していくのを見て嬉しかったんじゃない。きつと自分の娘がすっごく自慢だったと思う」

高階は川浪のことばを聞いて慰められ、悲しみと心身の重い疲れがほぐれていくのを感じた。「なんか、褒められすぎてて恥ずかしいわ。私、川浪君や永井さんとお話して、人ってやっぱりそれぞれで、いい人もいることがわかった。だから、人とちゃんと向き合いお話しする勇氣を取り戻せた気がする。もう自分が自分でいることにも迷わないし、人を怖くも思わないわ」

17

二人がサンドを食べ終わると、雨がパラパラと降ってきた。川浪と高階は祠^{ほこら}の廂^{ひまし}の下に入って雨宿りをしようとして五段ばかりの石段を登り、廂の下に立った。参道の方に向き直って、少しの間石畳に落ちる雨を見ていた。すると祠の裏手から猫がやっとなって出てきて、高階の足首に頭を

すりつけ、川浪の足にもぐいぐいと体を押しつけてきた。二人はいつものように猫を撫でてやろうとさっと同時にしゃがんだが、その拍子にガツンとおでこおでこをぶつけてしまった。「痛っ、川浪君、痛いわ」と高階が顔をしかめて言うとお、「おー、いてて、高階さん石頭だね。頭が割れっかと思った、ははははは」と川浪は笑いだしてしまった。高階も「痛っ」と言いながらも、つられて笑顔になっていた。おでこをぶつけあったことで、体を触れ合わせることへの二人の躊躇ためらいが一挙に吹き飛んだ気がしたのだ。それは一瞬のささやかな事件であったが、二人には大きな解放感を感じさせる出来事であった。

また、川浪には憔悴し暗鬱な表情をしていた高階が一瞬ではあるけれども笑ったことがとても嬉しかった。高階が朗らかに笑う顔をもっといっぱい見たいと心の底から願った。人を好きになるって、こういう気持ちになることなんだとしみじみと深く納得した。その納得感に背中を押されて、川浪は数日前に決意していたことをついに口にした。

「高階さん、高校を卒業したら、俺と結婚してくれ。いや、言い直します。結婚してください。俺、わかったんだ、高階さんが大好きだって。だから、俺と結婚してください」

高階は結婚という大問題を前置き抜きに突然持ち出されたことに驚いて、川浪をたしなめた。「川浪君、そんな未来に大きな責任を負うことを軽々しく言うって、それ無責任よ。私たちがまだ若すぎるし、これからいろんな人に会って、知らないことを経験して成長するの。もっといい人にお互いが会えることも大いにありえるわ。川浪君は私がかわいそうと思って、そんなこと言ってるんでしょ。私、同情されるのは嫌なの。同情と愛は違うと思う。川浪君がもっとたくさんの人と会って、他にはいないって納得してからそう言ってくれるなら考えてもいいけど」

そうは言ったものの、高階は川浪のまっすぐなことばが泣いてしまいたいくらい嬉しかった。悲しいとき嬉しいときに安心して身を委ねられる男ゆだの胸があり、委ねた身を優しく抱きしめてくれる男の腕があることを高階は理解したからだ。それは父親では果たせない役割であった。

川浪は高階にたしなめられても悪びれずに更に訊いた。

「返事は今もらえないの？俺、いろいろ経験しても高階さんを選ぶと思う。だから、今、結婚するって言って欲しいんだ。俺でよければだけど。だめなら、だめと言って欲しい」

「わかったわ、それなら、二人とも第一志望の大学に合格したら、結婚について真剣に考えましょっ、きちんと計画を立てて」

その条件を出されて、川浪はこれまでの受験勉強では第一志望校の合格は難しいと思っていたので、顔を曇らせた。一方高階は、たとえ川浪が希望の大学に受からなくても、川浪に対する気持ちは変わらないと考えていた。しかし、そうではあるけれども、二人で真面目に第一志望校の合格というハードルを越えようと努力した上で、二人の未来について決心したかった。それで更に言い足した。

「受験なんて結婚生活で行きあたる困難に比べたら、多分、それほど難しいとは言えないんじゃない。だから、川浪君にはまず受験のハードルは乗り越えて欲しいの」

こう言われて、川浪は自分の学力不足に怖気づいて、後に引くことはもはやできなくなった。

「よし、俺、今日から死に物狂いで勉強する。絶対合格して高階さんと結婚する」

川浪の誓いに励まされ、高階も沈んだ気持ちを立て直して、未来への誓いを元気に宣べた。

「私もしっかり自分の人生を生きなきゃいけないって思う。でないと、私をここまで育ててくれた父に申し訳ないし。だから、法曹界に進めるように勉強するし、川浪君との結婚について真剣に考えられるように、これまで以上に一生懸命勉強するって決心したわ」

18

二人が誓いを宣べる間、じっと餌を待っていた猫にソーセージを与えていると、いつしか雨も止んでいた。二人は神社の石段を降りて駅に向かうことにした。参道の石畳を踏みしめながら、川浪は「高階さん…」と問いかけ、手をつなごうと高階の手を初めて軽くにぎった。高階はその手を拒まずにそっとにぎり返すと、しなやかな体をわずかに傾げてほんの少し川浪に凭せかけた。肩が触れ合い息遣いがわかるほど近づいた高階の身体の気配に川浪は体が熱くなった。同時に、にぎり合った手の感触を通して、川浪は自分が受け入れられていることを感じた。二人は恥じらいながらも手をつないで、互いの胸の思いを感じ合いながら、稲荷神社を後にした。昼下がりの雨後の空気は一段と冷え込んでいたが、恋する二人はその寒さにまったく気がつかなかった。